

第三百七回 青葉会

平成二十三年十月二十七日(木) 午後六時〜九時

丸紅一階来客食堂「談話室」

〈選者〉 ☆川合万里子 先生

〈出席者〉

今井紀久男 大林猛 小川恭延 久米五郎太 小西弘子 豊田ゆたか 中野一灯

橋口隆 山内天牛

〈投句〉

伊賀山そらお 石川清 柿崎忠彦 小早健介 朱牟田恵洲 土谷堂哉 福島正明

古田昇 南平和夫 宮内規雄 山崎亜也 渡邊盛雄

赤田堅 庄司龍平 高橋敏郎 早川允章 福島正明 村田くに子 山崎青史 山本三恵

〈紙上選句〉

《選者吟》

殿(しんがり)の下手な着水初鴨来

万里子 (弘・一・隆・正・青)

(青：初めての長旅で疲れた若鴨か)

(正：「来」を「群」にしたら如何なものでしょうか?)

忌(いみ)明けの旅や秘湯の山粧ひ 全 (堅)

聴講へ櫛落葉を追ひながら 全 (紀)

朝寒や主治医とダンベル体操会 全 (紀)

ウオーキング木枯一番吹くままに 全

《互選句》

五点

一節を聞かせて船頭秋うらら

堂哉 (五・敏・允・く・天)

(☆↓船頭の聞かず一節秋うらら) (天↓聞かず)

☆国盗りの山城址や鷹渡る

一灯 (万・恭・敏・ゆ・正)

千枚田の畦に万燈能登の秋

盛雄 (堅・弘・敏・一・允)

☆小鳥来る原発岬の入日かな

紀久男 (万・恭・五・ゆ)

虫の闇家路を急ぐ娘あり

猛 (弘・ゆ・隆・三)

☆葉が落ちて古木の見せる曲線美

忠彦 (堅・猛・恭・一)

☆深秋や一力茶屋の扉普請

弘子 (万・紀・一・正)

(正↓「普請中の茶屋の黒塀秋深し」では?)

新走り枡もて杉の香を酌めり

一灯 (恭・敏・ゆ・く)

☆月冴ゆる駅裏に酌む草鞋酒

全 (万・弘・龍・く)

☆日は西にボタ山覆ふ草紅葉

全 (万・ゆ・允・青)

(青：往年の炭鉱景気も今は茫々たる草の下。)

往時茫々の感が西日と草紅葉でうまく表現されている

三点

赤そばで伊那の山裾染まりけり

猛 (敏・天・三)

したたかに転び身に入む道後の湯

弘子 (紀・五・く)

深刻な話はせずに栗ごはん

全 (猛・五・天)

満月や使者は翁の戸を叩く

健介 (堅・弘・三)

☆ふるさとの渋柿吊るす二三(にさん)連

ゆたか (万・堅・天)

風にきく江戸追分濁り酒

全 (一・允・正)

(正↓上五「興に乗る」では?)

パレスチナ弁証法が咳をする

正明 (紀・龍・隆)

☆神の留守男の本音が現れる

全 (万・隆・三)

秋の蚊を叩きかねたる日和かな

そらお (く・天)

鬼やんま浄瑠璃仲間また逝けり

紀久男 (五・三)

御園座千穰楽打上げ

新走り海老蔵殊勝に謝辞述べる

全 (敏・允)

秋晴れて窓際にあり日の恵み

恭延 (堅・五)

リハビリや休み休みの秋の蝶

忠彦 (紀・隆)

二点

栗拾ひ遠くに噓(くさめ)聞こえけり
つづれさせ芸妓の名札軒に並み

五郎太 (恭・天)
弘子 (一・青)

(青：京都だろうか。こおろぎの鳴き声と芸妓のわびしさが合っている)
魚屋も八百屋も担ぐ秋神輿

天牛 (正・青)

一点

☆追熟(ついじゆく)の柿つくらんと忍一字

清 (万)

葉の命最後に燃やし夕紅葉
運動会知らず空砲朝寝床

全 (紀)
恭延 (青)

(青：突然のドーンに驚いて目覚めることも)
天災も人災も経て秋寂(さび)びぬ

全 (猛)

ベンチにておしめ替への子天高し
珊瑚樹の実はなほ赤し朝の雨

忠彦 (龍)
五郎太 (龍)

同行に蝶の連なる秋遍路
針先で秋空を裂く飛行雲

弘子 (ゆ)
健介 (猛)

席譲られ些か慥然秋深む
名優の訃告ぐるラジオの夜寒かな

全 (紀)
惠洲 (猛)

(人間国宝の中村芝翫 83歳)
コスモスの吹かれマツコリ白磁杯

ゆたか (三)
一灯 (万)

☆高西風や魔の稜線の鉄梯子
(穂高)

隆 (龍)
全 (猛)

秋の夜や静寂空間選句入る
すれ違ふひとの香や金木犀

全 (隆)
正明 (允)

浮寝鳥世界は頭の中にある
池の面に紅葉且つ散る万華鏡

昇 (允)
和夫 (紀)

新涼や気温差感ず加齢かな
さまざまの色を配して秋の山

全 (天)
規雄 (天)

音も無く降る雨白く秋深む
秋袷妻の衣紋の抜き加減

全 (青)
亜也 (青)

(青：色気のある奥さんで幸せですね)
青蜜柑薄き皮剥きふと予感

全 (龍)
全 (正)

秋麗ら午後のホテルや見合席
(☆↓「や」を「の」に) (正↓「秋麗らホテルの見合始まりて」では?)

全 (正)

☆花屋にも大きな南瓜ハローイン
色づきて柿の豊年やつと知る

天牛 (万)
全 (恭)

野も海もひとつの棺花筏

盛雄 (紀)

●次回青葉会

十一月二十四日(木) 午後六時〜九時 丸紅一階コンチエルト 「談話室」

▲当季雑詠各自五句。 投句二句
十二月九日(金) 正午〜五時 寄席見物(末廣亭 昼の部)

午後六時〜九時 年忘れ句会 「談話室」

以上 文責 紀久男

一、今回は先生以下10名出席。投句12名。萬緑全国大会に参加された先生と弘子さんの松山土産（一六本舗と山田屋の饅頭）、隆さんの「八海山」、小生の名古屋・御園座出演の折りに頂戴した酒「三重大学」大吟醸と純米吟醸（津の平松さんより）とおつまみ（楠田ヒロミさんより太子堂のあられと切干）。寄贈された甘辛両方を賞味し乍ら開始。

いつもの弘子さんの進行役で御覧のように堂哉さん、一灯さん、盛雄さん、が好成绩でした。（小生のミスで正明さんの投句葉書を忘れてしまい。句会場からTEL。咄嗟のことで別の作品をお出しにされました。謹んでお詫び申し上げます）

二、当日の話題（一）子規・草田男の墓（二）「坂の上の雲」（三）馬宮さん尾崎さん。そして松森さんの訃報（四）先生の作品で知ったお元氣ぶり（成蹊大学でパソコン講習。ダンベル体操会等）

（五）正明さんの句にあるパレスチナ（六）御園座（経営危機。河東節の旦那衆。千穂楽打上げ等）（七）大滝長孝さんの落語の会等々。

三、関係者近詠

大人まで汗疹いっぱい余震また

万里子

朝霧や賀茂川沿いを大学へ

規雄

夏風邪を休暇の父が貰ひ合ひ

全

「NHK俳句」11月号 高野ムツオ選

みんみんのBGMを油蟬

全

サイレンの疎まし朱夏の甲子園 丹野敦雄

秋立つや自己模倣こそ慎まむ

全

「俳句」11月号 大牧広選（選評省略）

父僧は元氣と世襲の盆の経

眞希子

美しきをみなの謂か女郎花 允章

桔梗咲く語るも聞くも病む同士

全

ほんのりと明るきあたり後の月 全

初秋や一文書くに読む十書

全

新米を食べて余生の恙なし 全

祇園会の厄除け粽軽さかな

弘子

わが名もやがて彫らるる墓を洗ひけり 惠洲

切取り線どほり切らねば雲の峰

全

灯台は廃されてゐて彼岸花 全

津軽遠し千空遠しも夏の果

全

雄食ふもむべ蟪蛄の面構へ 全

犬癒えてそろり草踏む今朝の秋

全 紀久男

手にするは格安切符小鳥来る 正明

仏壇に白玉と酒族（うから）待つ

全

爽やかや自前の齒数二十七 全

掛声もめりはりのち圓朝忌

全

喜寿終えしあと白秋の能登路行く 盛雄

花莫産を部屋一杯に夕餉せる

和夫

国境の長き海原秋北斗 全

蘭草敷き大の字になり昼寝する

全

朝市の媪のかけひき男郎花 全

携帯の小さな窓に孫の顔

全

奥能登のキリコ祭礼秋深む 全

震災を忘れこそせねねぶたの夜

忠彦

旅の朝お代り二杯とろろ汁 允章

ペランダの眼下に広し秋の浜

全 恭延

粧へる山へ分け入るトロツコ電車 全

登るほど紅葉濃くなる赤城山

全

全

四、孤舟さんの第三句集『蒼茫』上梓（10月30日発行。喜怒哀楽書房¥1,000）昨年四月、急

逝した小澤克己師（「遠嶺」主宰）の選と自選の句を少し加えた句集の由。俳句に真面目に集中して精進した成果がありあり。お薦めです。

自選十句が本のカバーにあります。小生好みの句を列記してみました。

右顧左眄せぬ蟪蛄のしたり貌 牡丹雪妥協の道のありぬべし

柿落ちて空にさざ波生まれけり 銀漢へ積木の汽車の発車ベル

何れ採る帰俗か離俗春の月 侏儒の声する紫陽花の毬の中

五、九月句会の恵洲さんの「他人事（ひとごと）と聞く疾（はやま）しさや大出水」について選ばれた先生は

出水は夏の季語であるから秋出水にしたらどうかとご注意頂きました。恵洲さんによると愛用している山本健吉の歳時記では出水は（台風の時期の）秋の季語で秋出水とも言うという趣旨になっている由です。秋櫻子が秋、角川と虚子が夏と意見が別れている由です。仰言るようにこういう例は結構あるようです。